

表現運動における題材に関する研究

－イメージ拡散力に着目して－

荒井 悠吾 （ 岡山大学 ）

1. 目的

イメージを自由に表現する表現運動・ダンス領域の中に題材を用いた指導法がある。題材とは、学習者が身体で表現する際にイメージを膨らませる材料のことを指す。表現領域でどのような題材を選択するかは、学習者が題材を捉えて表現する学習過程に強く影響するため、重視されなければならない（井上，1983）。

本研究では学習指導要領に記載されている「学習者1人1人にとって自分なりのイメージが広がる題材」に着目した。そして、学習者それぞれのイメージが広がる力を身体的な「イメージ拡散力」と名付け、量的・質的な観点から検討を行うこととした。

2. 研究方法

1)対象者：0大学の大学生22名
2)調査方法：令和3年7月～10月
3)分析方法：【第1段階】学習指導要領や文部科学省が発行する指導マニュアルを参考に題材を選出し、被験者に即興表現を実施させた。その後の聞き取りを基に、表現した数、表現内容の質の観点から題材が持つ拡散力の高低により、「拡散的思考がなされており、かつ身体で表現されている」・「拡散的思考はなされているが、身体で表せていない」・「拡散的思考、身体表現がなされていない」の3つに分類できた。【第2段階】上記の結果により、題材よりも本人が持つ資質、感性がイメージの拡散力に影響しているという可能性が浮かび上がった。そこで第2段階目の研究として、3つのグループからそれぞれ数名選出し（合計7名）、即興表現時に記録撮影した映像を使い、イメージを身体化するまでの被験者の内観について、再生刺激法による半構造化インタビューを行った。その後、M-GTA分析を行い抽出された概念を整理し、関係性を図示した。

表1 イメージの仕方の3パターン

イメージの仕方のパターン	表現中の意識状態	過去経験・記憶の表出の仕方
I	無意識的	生成型
II	意識的	生成型
III	意識的	取り出し型

3. 結果と考察

分析の結果、20のコアカテゴリー、55のカテゴリー、146の定義が抽出された。これらを、以下の＜意識/無意識＞、＜取り出し/生成＞という観点からさらなる分析を行なったところ、イメージの仕方のパターンを「I生成型(無意識的)」、「II生成型(意識的)」、「III取り出し型(意識的)」の3つに分類することができた。

1)＜意識/無意識＞の観点

無意識的な被験者は表現中、心身共に題材のイメージの中に入り込み、目に映った対象物を反射的に身体で表現する傾向にあった。そのため動作内容を覚えていない被験者が多く見られた。意識的な被験者は既知の複数の選択肢から表現内容を意識的に決定し、身体で表現する傾向にあった。

2)＜取り出し・生成＞の観点

取り出し型は、過去の経験・知識を記憶から引き出し、具体的な動作を模倣する傾向にあった。生成型は、経験によって記憶された感覚をもとに、新たなイメージを無意識的に生成し、それらを身体で表現する傾向にあった。

4. 結論

即興的身体表現におけるイメージ拡散力には、即興者が過去によって記憶した多くの知識・感覚が影響している可能性が明らかになった。また、取り出し型よりも生成型に近いほうが、イメージ拡散力が高いということが示唆された。